

も勝れ、殊に能く保存して寒氣を凌ぎ、翌年の産出までも其の風味損せず。諸村にも多分地黄煎町の苗を取りゆき培養なしたり。故にその初めは地黄煎町の薩摩芋とて、其の代價も他村の産とは高直なりしかど、今は諸村にも工夫を凝し能く産出して、寒氣をも保存する事とは成りたり。抑、此の蕃薯は、越中國人宮永正運の私家農業談に云ふ。元祿の末琉球より薩摩州へ蕃薯の種を傳へけるより初り、普く廣まる故に、之を琉球芋とも薩摩芋或は甘いもなどいへり。或醫師の曰く、蕃薯・甘藷の二種はもと暖國の産にして、海中の人これを食へば命ながしと、貝原先生もいへり。然れども寒國は、天候より人物禽獸草木まで、皆暖國に變ずる事明かなれば、寒國の人は是を食へば、毒有りて其の性を毀り、屢、疔疽等の病を發すといへり。是をこゝろみるに、予が近郷にて、蕃薯・甘藷を好んで食ふ人數十人、はからざるに疔疽を病みて死す。後人多く食ひて身をあやまつべからず。とあり。但し今は寒國の産と成り、その害なしといへり。

○鶴來往還

此の往還は、舊藩中は上使街道と唱へ、幕府巡見使の通行道にて、上口能美郡小松より、國府の舊地なる國府村・佛原などの地を経て、三坂越とて府峠を越え、別宮・吉野・吉岡などの地を経て、鶴來へ出る。此の道路はいにしへの官道なり。故に巡見使も此の往還をば通行すといへり。按ずるに、文明十八年の回國雜記にも、加賀國江沼郡橋より敷地・忌波・動橋を経て、能美郡小松の邊なる本折へ出で、佛原・吉野・吉岡を経て、鶴來へ出でたるよし記載せり。又此の鶴來往還は、地黄煎町端より道程四里なるが、鶴來より金澤へ運送する炭・雜穀或は杉板などを荷ひ運べる事、四季絶ゆる事なく、實に金澤への要路なりといふべし。

○鶴來往還道傳話

山本基庸の微妙公夜話録に云ふ。鶴來より金澤までの間道作り候やう被仰出、奉行は人持組堀與左衛門と山本瀬兵衛へ被仰付たり。伺申儀有之言上書相調へ、與左衛門並瀬兵衛連判し、若し御尋之儀も可有之哉と瀬兵衛持參し、小松へ罷越指上げる處、則御前へ被召出、色々御尋之儀共有之、さて道普請場へ罷出候様子御尋あり。鶴來へ近き間は

鶴來に止宿仕り、段々金澤の方へ罷出候ゆゑ、近邊の在家に止宿仕候。朝は六つ時より罷出、晚は七つ半時頃まで爲仕候旨申上候へば、晝食は如何仕候哉との御尋也。與右衛門は辨當爲持被下候。私儀は燒飯被下相勤候よし申上ける處、與左衛門は辨當を振廻可申とは不申哉と御尋也。成程左様に申聞候得ども、數日の事なる故、堅く相斷不被下旨申上候處、たはけたる事也。此書付の判形ちいさき事に候へども、是はいたくもかゆくも無之事ゆゑ、其分にてもよし。辨當食はぬは第一損なる事。小氣成男也。玄蕃方より内證を以て、與左衛門へ申遣候へとの御意也。即ち津田玄蕃より御意の趣申遣候へば、與左衛門も、されば先達てより左やうに申入候處、迷惑させ申とて立腹し、夫より辨當をば被振廻被下候よし、亡父瀬兵衛咄申。とあり。按ずるに、堀與左衛門は堀秀治の孫也。二代與左衛門寛文三年に祿を辭し、弟二人を召具し退去すと、菅家見聞集に見ゆ。山本瀬兵衛は山本久助の次男にて、初め能州の小代官を勤め、後金澤へ召寄せられ、新知僅かに賜はり、組外の士列に加へられたり。故に甚だ小身なりしかど、人持組の大

身なる堀與左衛門の相役に命ぜられしゆゑ、辨當などの事をば利常卿の仰せられしもの也。